聖なる夜
聖なる穴

桐山襲

河出書房新社

聖なる夜
聖なる穴

桐山襲

桐山襲（きりやまかさね）
一九四九年、東京生まれ。
著書に『パルチザン伝説』（作品社、一九八四年）、『風のクロニクル』（河出書房新社、一九八五年）、『戯曲、風のクロニクル』（冬芽社、一九八五年）、『スターバト・マーテル』（河出書房新社、一九八六年）、編著に『国鉄を殺すな』（冬芽社、一九八六年）がある。

聖なる夜　聖なる穴

昭和六十二年二月十五日　初版印刷
昭和六十二年二月二十五日　初版発行

著　者　桐山　襲
装　幀　東　幸見
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電　話　四〇四―一二〇一（営業）
　　四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二
印刷　大日本印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社
©1987　Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN 4-309-00465-2

聖なる夜　聖なる穴

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一九七〇年十二月十九日深夜――正確にいえば十二月二十日の午前零時三十分――コザは炎を身に纏った。コザ市、ゲイト・ストリートで起こった交通事故処理をめぐって、米兵の発砲に端を発した暴動は、みるみるうちに夥しい群衆を呼び集めた。やがて火が、亜熱帯の十二月の深夜を彩った。ゲイト・ストリートは、嘉手納基地正面ゲイトへと直結する大通りである。群衆の基地への殺到を防ぐために、警察本部は沖縄本島の全警察官に非常呼集をかけた。米軍はMP三百人をカービン銃で武装させた。群衆は、米人車輛七十三台、嘉手納基地雇用事務所、米人学校などを焼き打ちして、これに対峙した。タクシーの運転手は、市外から多くのひとびとを前線へ運んだ。バリケードが何箇所にも築かれた。武器と炎を持った沖縄人は数千人に達した。炎をさらに燃え立たせようとするかのように、男たちは指

笛を吹き鳴らし、火の周りでは女たちがカチャーシーを踊っていた。群衆の中には、軍労働者、運転手、店員、女給、学生、失業者がいた。そしてさらに、幾百人ものコザの娼婦たちが、ノースリーブの腕を夜の中に高くあげて、蜂起した群衆の先頭に立っていた。

これは、その夜の、ひとつの恋の物語である。

「明かりを消すよ。……そう、これでいい。これで完全な真っ暗闇になった。横にいるきみの顔だって見えやしない。まるで眼玉が、二つとも闇の中に吸い込まれちまったみたいだ。……いかにも異国の街で、夜を迎えているという気がするな。抱きあった後の汗が、ゆっくりとシーツに染み込んでいくのが分かる。……いい夜だ。こうして二人で横になっていると、なんだか時間というものから解き放たれて、体の隅々までが柔らかくなってゆくような気がしないか？　時間に追いまくられていたぼくの東

京の生活が、指先や足の爪先から染み出して、段々とどこかへ消えていってしまうみたいだ……。実際、ここは東京からずいぶん離れているからな。何百キロ、いや何千キロかな？　東京は、夜の中の真っ黒な海の、そのはるか彼方だ。今夜あたり、向こうでは雪でも降っているかも知れないが、こっちではこうして裸で寝ていられる。……十二月か。暑い十二月だな。風が、少しあるといい――」

「明かりをつけて」

「あ？　いま、何て言ったんだい？」

「明かりをつけて、と言ったわ」

「明かりを？　きみはさっき、明かりを消せと言ったばかりじゃないか」

おれは目覚める。呪われたおれの名前・ジャハナよ。

だが、ここはいったい何処なのか？　おれの眼は何も見ることがなく、おれの耳

は何も聴くことがない。ここは光と音の絶えた場所、完全な闇だけが支配している永遠の冥界だとでも言うのだろうか。それとも、眼も耳も口も、すべてが形を整え始める前の暗闇、太古の沈黙の王国ででもあるのだろうか。おれは眼無き者、口無き者、耳無き者だ。いや、おれの手足すら、まだそれぞれの形を有つには至っていない。植物の芽のような小さなものだけが、やがておれの四肢となろうとして、幽かに存在し始めているにすぎない。……混沌の眠りの海から、おれはいまようやく目覚める。幾つもの過去が在ったような気もするし、おれのいのちが幾度も生まれては死んでいったような気もする。或いは、それは無限に続く時間の廻廊の中を通り過ぎた幾つもの夢であったのかも知れない。おれにはよく分からない。時間さえもが、まだ水母のような姿で微睡(まどろ)みながら、原初の泡立った海の中に浮かんでいるのだ。

おれは目覚める。ここは何処なのか？

誰もそれを知らない。まだ誰も、おれの存在を知らず、おれの名前すら知らない。

だが、この深い闇、世界の暗黒を集めたこの閉ざされた場所で、既にひとつの名

前が生き始めようとしている。忘れ去られたはずの名前が、もう一度生き始めようとしている。おまえ――呪われたおれの名前・ジャハナよ！

その一個の名前について、おれは思考を続ける。いま目覚めたばかりのおれにとって、これからの時間は無限といってもよいくらいだ。だから、おれが美しい炎を纏ってこの閉ざされた場所を出て行くときまで、おまえについて思考することだけが、おれに与えられたほとんど唯一の仕事だ。おれはおまえについて考える。光り輝く名前・ジャハナよ。誤って讃えられた名前、呪われたおれの名前よ！

「ほら、きみの言うとおり明かりをつけたよ。これで満足かい？」

「それではまぶしすぎるわ。それとは違う、もっと小さな明かりよ」

「小さな明かり？　ああ、こうかい？　これじゃあ、ほとんど暗がりと同じじゃないか。出来損いの蠟燭みたいな、しみったれた小さな電球が、ひとつだけ天井に浮かん

でいる――」

「いいのよ、これで」

「なんだか貧乏くさいな。これじゃ、いかにも売春窟に泊まっているという気分だ……。どうして真っ暗にしないんだい？　もしかすると、きみは闇が怖いんじゃないのか、まるで十四歳の少女みたいに――」

「好きなのよ、これくらいの明るさが。ほら、部屋中がぼんやりとして、まるで森の中で迎えた朝のようだわ。永い眠りからようやく覚めたみたいに、すべてのものが柔らかく、ほのぼのとゆらめいているでしょう。昼間ならしみだらけの板壁も、雨漏りの痕のある天井も、それから窓の破れたカーテンだって、これくらいの明かりならば、姿を変えてしまうことが出来る。輝くことがないのよ。眼も耳も、すべてが落ちつくわ。人が生きていくためには、これくらいの光があればいいのよ。ほんの少しの光だけで、人は生きてゆくことが出来るわ。それから、死ぬときにだって、きっとこれくらいの光で十分なんだわ。……あたしも、いつかは死ぬのよ。ねえ、あんた分かる？　あたしもいつかは死ぬのよ。あたし、まだ十九歳だけど――」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「十九歳か――。素晴らしい年だな」
「人は死ぬわ。たとえ十九歳でも、たとえ三歳でも」
「ぼくは三十歳を越えた。三十の坂を越えた、とでも言うのかな。しみじみと厭な年だよ。何故かって？　考えてもみるがいい、三十歳という年は自分の人生の半分が終ったということなんだ。いや、半分以上かも知れない。だが、残りの半分の中に、いったい何が残っているというんだ？　残りの半分、つまりこれから三十回もの春と夏と秋と冬の間、ぼくは大して起伏のない道を歩きながら、だんだんと歳をとっていくことしか出来ないんだ。いいかい、これから三十年間もだぜ。もしも八十歳くらいまで長生きしたら、それこそ絶望的だろうな。これから三十年生きて、そこからまだ二十年もある！　いったい何をすりゃいいんだ？」
「あんたは、何もすることがないのね」
「ああ、八十歳まで生きたらな。毎日、何かすることはないかと考えて、それだけで一日が終るだろう。それとも、昨日は何もしなかったと反省して、それで一日が終るかも知れない。……昔は良かったな。人生五十年。長すぎもせず、短すぎもしない。

やれやれひと仕事終った、と思った頃に、ちょうど死神がやって来る。やあ、来ると思っていたよ、というような具合だろうな。未練は、ほんの少し残るかも知れないけどな……。五十歳までといえば、ぼくはあと二十年足らずだ。きみは、あとどれくらいになるかな？」

「分からないわ」

「あと三十一年だな」

「分からないわ。……三十一年どころか、三十一日だって、いえ、三十一時間だって、あたしには分からないわ」

おれは目覚める。ここは何処なのか？

何か柔らかなものが、おれの体をすっぽりと包み込んでいる。それは、目覚めたばかりのおれの体温と同じくらいの、温かく、かつ丸い宇宙だ。おれの皮膚は、ま

だ永遠の微睡みの中に在るのだろうか、おれを包み込んでいるものと溶けあって、自分自身の輪郭さえもぼんやりとしか感じ取ることが出来ない。自分の手足の柔らかな芽を、おれはまだ眠らせたままにしておく。それらが独立した姿を持ち、そして独立した仕事を与えられるのは、まだずいぶんと先のことにちがいない……

おれは眼を開く。だが何も見えない。黒く塗り込められた世界が、まるで大きな目蓋のように、おれの二つの瞳を覆っている。おれは仕方なく眼を閉じる。——今度は耳を澄ましてみる。おれの耳、海中から陸へと上り始めたばかりの最初の生物のような形をしたおれの二つの耳が、微かな空気の動きに触れる。

空気——いや、それは空気ではなくて、海の水であるのかも知れない……。潮水よりも軽い、だが空気よりも重いもののなかで、生まれたばかりのおれの耳は、幽かに流れゆくものに触れる。

音が聴える……

闇の中を流れてゆく幽かな音。繰り返し繰り返し打ち寄せるもの。あえかなる夜の潮の響(とよ)めき……

もしかすると、それはおれ自身の鼓動であるのかも知れない。目覚めたばかりのおれの胸の鼓動、やがて失なわれるであろうおれの生命の轟きが、世界から閉ざされたこの場所で、千年も前から呪われた時を刻み続けているのだ。

いや、それはおれ自身の内側の音ではなく、おれを産み出そうとしているものの鼓動であるのかも知れない。秘められた暗部を流れる生命の轟きが、おれの二つの耳を柔らかく包んで繰り返されている。おれはその音に耳を澄ます。遠い泉のほとばしり、流れゆくものの微かなアダージョ……。そうだ、おれの名前よ。このような冥く閉ざされた場所から、おまえは生まれ出て来たのかも知れない。

呪われたおれの名前・ジャハナよ。九月の夜明けに、急な潮の流れに押し流されるようにして、おまえは生まれる。外界の空気に触れて、おまえの真新しい口は初めての泣き声を挙げる。その泣き声は、おまえが三十六年後に発する狂気の叫び声の、その予行練習のようだ。だが、おまえを取りまいている大人たちは、誰もそのことには気づかない。誰もが、おまえの最初の叫び声を祝福する。祝福のざわめきと、幾種類もの蟬たちの声に包まれて、おまえはもう一度泣き声を挙げる。それは

一八六五年、いまから百年以上前のことだ。

†

琉球王国島尻郡東風平村字東風平――これがわたしの生まれた土地の名前である。その土地の名前は、やがてわたしの力によって、わたしの名前と共に、ひとびとに語られることとなるであろう。だからわたしは、ここにわたしの生涯の物語を語り始めるにあたって、まずその土地について述べたいと思う。

東風平（こちんだ）――それは名前のとおり、春になれば太平洋からの東風が吹き渡る土地であった。風は、梯梧の花々をふるわせながら、甘い匂いを纏いつかせて吹いた。

東風平は、海に接することのない、丘の上の村ともいうべき土地であった。だが、海が全く見えなかったという訳ではない。緩い坂道を登って、少しだけ天に近くなった場所に立てば、朝の太陽の昇る方角には具志頭の海が、正午の太陽の方角には糸満の入江が、季節や時刻によって様々に色を変えながら、吹き渡る風の中に輝いているのが眺められた。

わたしの生まれたのは、東風平の中央ともいうべき四つ辻から、ほんの少しだけ離れた家であった。だからわたしは、東風平のほとんど中点で生まれたということができる。――四つ辻には大勢のひとびとが往き来した。裸の胸で荷車を牽いている男たちや、小豚を頭の上に乗せた女たち、鳥籠をかかえた若者、物売りの流れ者などが、東風平の四つ辻を通り過ぎて行った。つまり東風平は、琉球王朝の旧都たる首里と、新しき時代の都たる那覇との、結接点ともいうべき位置を占めていたのである。

月に幾日か、四つ辻には市が立った。針を商っている老婆・海の匂いをさせながらやってきた乞食・山羊をつれた巫女・春になると必ず回って来る耳の聴こえない聖者が、それぞれボロ布のような着物を纏いながら、真昼の四つ辻をざわめかせていた。四つ辻には巨大なガジュマルの樹があって、夥しい気根を天から地上へと垂らしながら、東風平の千年の時を刻んでいた。風に孕まれた花々の匂いと、埃と、汗と、獣たちの毛穴から発する強い臭いが、生まれたばかりのわたしの鼻孔を苛しませた。大きな森(ムイ)のように感じられるガジュマルの樹蔭にはいれば、そこはまるで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com